

学力向上フロンティアスクール用中間報告書（小学校用）

都道府県名

島根県

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	安来市立十神小学校								
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	2	2	2	2	2	2	15	26
児童数	61	72	66	66	75	72	5	417	

研究の概要

1. 研究主題

「豊かな心をもち、自ら学ぶ十神っ子の育成」
～確かな学力を身につけるための指導法の工夫～

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

・全学年・国語科

学校として、当該教科に関する研究実績があるため。

・全学年・算数科

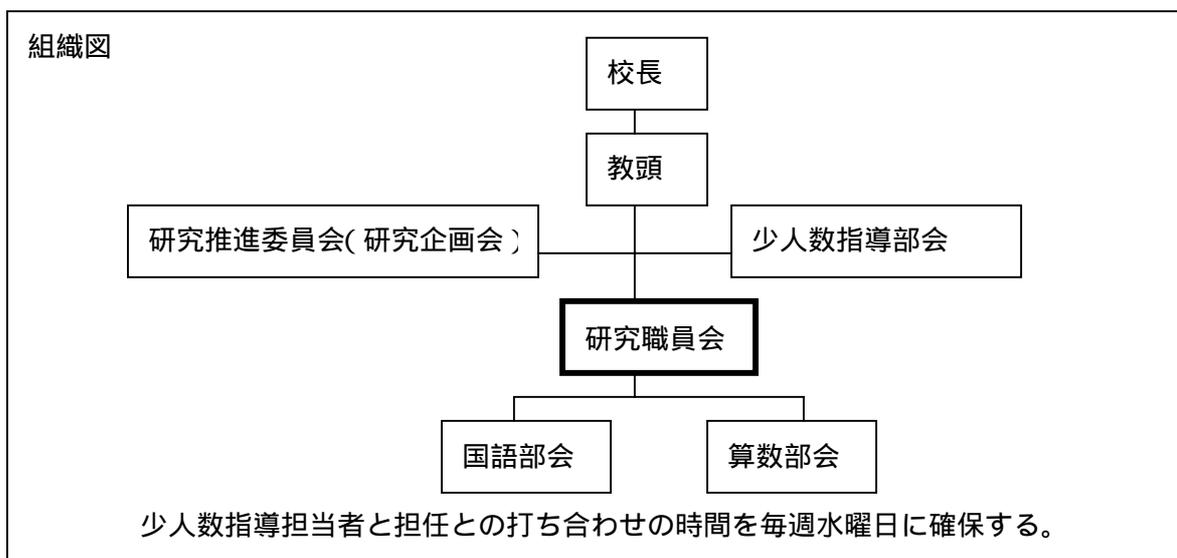
児童の理解の状況に差が出やすい教科であるため。

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	テーマ
	一人一人をきめ細かにとらえ、個に応じた指導法を工夫する。
	研究の見通し
	1. 児童の実態を的確に把握する。
	2. 国語科は「読むこと」、算数科は「数と計算」領域に視点を当てて、教材開発、指導方法の工夫、評価の工夫について研究を進める。
	研究の内容・方法
	1. 国語科
	教材開発
	・子どもが興味関心を持って取り組める教材を開発する。
	指導方法の工夫
	・主体的に追究していくことができる「めあて」を設定する。
	・一人一人が考えをつくる時間（一人読み）を確保する。
	・「めあて」を持つ、考えをつくる、考えを交流する、振り返るという学習過程をとる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の思いをとらえ、個に応じた働きかけをする。 <p>評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元、本時の評価規準を明確にする。 ・「ねらい」や「めあて」に即した振り返りをする。 <p>2. 算数科</p> <p>教材の開発</p> <ul style="list-style-type: none"> ・補充的な学習内容・教材、発展的な教材を開発する。 <p>指導方法の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすい課題提示の仕方を工夫する。 ・作業的、体験的な活動を重視する。 ・T T指導、少人数指導を学習内容に応じて効果的に取り入れる。 ・個人カルテを基に、一人一人のつまずきを把握し支援する。 <p>評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元、本時の評価規準を明確にする。 ・評価カードを工夫する。
<p>平成 16 年度</p>	<p>テーマ</p> <p>児童の実態や学習内容に応じて、T T指導や少人数指導等を組み合わせ、より効果的な指導の在り方をさぐる。</p> <p>研究の見通し</p> <p>研究教科を算数科に絞り、一人一人の実態をとらえるとともに、よりきめ細かな指導方法・指導体制の工夫改善を図る。配慮を要する児童に対しては特別支援教育校内委員会との連携を図る。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>個のつまずきをとらえるとともに、補充的な学習や発展的な学習など個に応じた指導のための学習教材の開発をする。</p> <p>各学年の実態や学習内容に応じてT T指導や少人数指導を効果的に取り入れる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもにとってのT T指導のよさや少人数指導のよさを生かし、単元のどの場面でT T指導や少人数（習熟度・課題別等）指導を取り入れるのか、またどう組み合わせていくと効果があがるのか検証していく。 <p>児童の学力の評価を生かし、指導の改善を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の学習状況を適格に把握するために、C R Tや単元前のレディネス調査、意識調査などをし、指導に生かす。 ・自己評価カードや個人カルテを工夫する。

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

「学力」についての話し合いや「児童の実態把握」、「個に応じた指導の在り方」についての検討を基に、国語科・算数科を重点教科として授業改善を図ってきた。特に今年度は、一人一人をきめ細かにとらえることを重視してきた。

9 / 3 0 校内授業研究会

国語科 5年「心の通い合いを読みとろう～わらぐつの中の神様～」

1 2 / 3 公開授業研究会

算数科 4年「わり山(算)登頂大作戦」

算数科 6年「分数のわり算」

国語科では、対象となる教材との出会いを大事にし、自らめあてをもって読み進めていく子どもの姿を求め実践を重ねてきた。個々の読みを教師が的確に把握し、どの読みを取り上げていけばよいか、ねらいを明確にして授業を展開していった。

- ・ 自分のめあてに沿って考えをつくっていく時間(一人読み)を意図的に設定したことにより、叙述を基に自分の力で読んでいこうとする力を高めていくことができた。
- ・ 考えを交流する場を持ったことにより、様々な読みにふれ、自分の読みをさらに深めていく子どもの姿を引き出すことができた。
- ・ 実態調査や振り返りカードを基に、個の思いを大切にしたい働きかけをすることによって、学習に対する意欲・関心が高まってきた。

算数科では、「数と計算」領域における個のつまずきを把握し、一人一人に応じたきめ細かな指導方法の在り方を授業研究を基に模索していった。

- ・ それぞれの学年で事前の実態調査やプレテストを行うことによって、一人一人がどこでつまずいているか把握し、個別に九九表や具体物等の教具をもたせたり学習の

中で助言したりすることによって、児童の学習への関心が高まってきた。

- ・ 計算が必要になる具体的な場面において、作業的・体験的な活動を取り入れることによって、計算の仕方を自分で考えさせたり計算の意味についての理解を深めさせたりすることができた。
- ・ 指導体制の工夫として、T T指導や少人数指導の形作りを優先するのではなく、学級や学年の実態、学習内容に応じた指導形態をとることが効果的であることがわかった。低学年、習熟の程度や能力差の大きい学級ではT T指導により成果を上げることができた。また、1時間の学習の中でT T指導と習熟度別指導を組み合わせる授業を組み立てることによって、つまずきのある児童に寄り添った指導をすることができた。
- ・ ワークシートや自己評価カードを活用することによって、関心・意欲等の実態把握ができ、指導に生かすことができた。
- ・ 配慮を要する児童に対しては、特別支援教育校内委員会と連携をとり、個別支援計画を立て授業に臨むことによって、学習に対する意欲が高まってきた。
- ・ つまずきのある児童に、夏休みや放課後の補充指導を行うことによって、定着度が増してきた。

その他

- ・ 1学期は、「学力」「生きる力」のとらえ方について全教職員で話し合い、共通理解して実践を進めることができた。また、教材や指導方法について工夫して取り組むようになった。
- ・ 一人一人をきめ細かにとらえようとする意識が高まり、教師間の情報交換が増えてきた。
- ・ 県内外のフロンティア校の授業公開への参加や情報収集などを通して研修を深めることができた。

2. 今後の課題

国語科と算数科を重点教科として取り組んだが、やや研究の深まりがなかった。来年度は、算数科を中心に全学年で研究授業を行い、より効果的な指導体制・指導方法について深めていきたい。

今年度は、個のつまずきをとらえることや補充的な学習のための学習教材づくりに力を入れてきたが、今後は発展的な教材についても開発していきたい。

自己評価能力を高めるために、評価カードを工夫していきたい。

特別支援教育校内委員会を研究組織の中に位置づけ、一人一人の実態把握や個に応じたきめ細かな支援についての連携を図る。

日々の実践の中で個の変容を記録すると共に、客観的なデータを残すことも大事にしていきたい。

フロンティア校として地域や家庭へ情報発信をしていきたい。

学力等把握のための学校としての取り組み

7月に国語科・算数科の学習に対する意識調査を実施した。2月に同様の意識調査を行い、変容をとらえる。

算数科では、7月に「数と計算」領域を中心に2～6年生でつまずきをチェックをした。一人一人がどの学年のどの内容でつまずいているのか把握し、指導に生かしていった。

毎年2月に国語・算数の学力テスト（CRT）を実施している。今年度の結果と昨年度の結果を比較検討することによって、児童の変容をとらえる予定である。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

授業公開を実施し、近隣の学校への普及に努めた。

フロンティアスクールとしての取り組みに対して、保護者の理解を得るように努めた。

- ・12/3（水）の公開授業研究会「算数科4年・6年」では、市郡内の小学校と松江市、八束郡内の小学校から15名の教員の参加者があり、研究協議では学力や算数のきめ細かな指導についての話し合いが盛り上がった。
- ・10/21（水）参観日にあわせて保護者対象にフロンティアスクールとしての取り組み及び、少人数指導（習熟度別指導）についての説明会を実施した。
- ・学校便り（校長通信）で、地域や保護者に向け学力向上フロンティアスクールとしての取り組みやきめ細かな指導（TT指導・少人数指導）について発信した。